# He has no hands but yours !

井田　昌之

私の講義では，基礎的な実習としてキーボードタイピングをはじめのほうに入れている．タッチタイピング技術の習得にあまり力点を置きすぎるのはよくないが，かといって無視して通れる話ではない．かなり速く打てることが重要だなどと言ったものであった．

だいぶ前のことになるが，ある年，非常に熱心な学生がいた．この学生は，全体にまじめで一生懸命やっているのが，小テストや学生スクリーンのモニタなどをしているとよくわかる．しかし，なぜかこの学生は前のほうの席には座らなかった．そして，タッチタイピングの出来はまぁまぁという程度だった．このことにもっと早く気がつかなければいけなかった．当時は，機器を使った会話と指導に自信をもっていたので，教師用のコンソールの前にへばりついて，そこから多数の学生への指示，アドバイスなどを次々と繰り返していた．学生の様子はこれでわかるという自信があった．夏休みになった．ある日，突然衝撃的な出来事に出会った．その日のことは忘れられない．前方から，その学生が友人たちとニコニコと笑いながら歩いてきた．そのとき全身から血の気が引いた．心臓がドキンとし，泣きたい気持ちになった．彼の左手には指がなかった．「あぁ，なんと残酷な実習を強いてしまったんだろう」しばらくたってから，彼にタイピングの講義について聞いてみた．正確な表現は忘れたが，ともかく，とてもおもしろかった，ためになったというようなことを言ってくれた．

間違いなく，このことがあってから私のシステム設計に対する考え方，授業の仕方に変化が生じたように思う．それは，私にとっては，画一的なホストコンピュータ志向から，分散化志向への歩みとまったく同一の次元の同一の問題であった．そして，コンピュータネットワークが我々に与えてくれるかもしれない，新しいページを開く鍵であるようにも思えた．

今，アメリカに暮らしはじめるようになり，あらためて感じることは（同じくパラダイスを追放された仲間としての）Philanthropy はやっぱりまだまだ生きているということである．人々は助け合い，希望を信じ，またよく働いている．

He has no hands but yours. あるエピソード．アメリカのとある田舎の教会で会堂が焼けた．このときに，木製の十字架につけられたイエスの像の手の部分が焼けてなくなってしまった．これに心を痛めた牧師はむしろ逆に人々を勇気づけるべく，再建後の最初の説教で力強く語るのである．「He has no hands but yours !」と．

どうか，「あなたの手」を動かして，コンピュータを人々の道具としてさらにより良く使えるようにしていってほしい．それは楽しい仕事である．また，ものを自分の手で作ることを忘れたらその国はおわりである．私も努力したい．

（いだ まさゆき　青山学院大学/在 MIT AI 研）